



TITLE:

# イリ問題にみる清朝中央の政策決定過程と總理衙門

AUTHOR(S):

大坪, 慶之

---

CITATION:

大坪, 慶之. イリ問題にみる清朝中央の政策決定過程と總理衙門. 東洋史研究 2011, 70(3): 459-488

ISSUE DATE:

2011-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/192935>

RIGHT:

# イリ問題にみる清朝中央の政策決定過程と總理衙門

大 坪 慶 之

はじめに

第一章 崇厚の斷罪をめぐる動き

第二章 英佛による平和的解決の要求と總理衙門

第三章 廷臣會議と皇太后の政策決定

おわりに

はじめに

十九世紀後半から二十世紀初頭にかけての清朝では、慈安太后（東太后）・慈禧太后（西太后）による垂簾聽政が實施された（光緒七（一八八一）年<sup>(1)</sup>の慈安太后死後は、慈禧太后のみ）。これは、第十代皇帝同治帝（在位…一八六一～七四年）・第十一代皇帝光緒帝（在位…一八七四～一九〇八年）が幼少で即位したことに伴うものである。そこでは、同治帝の生母である慈禧太后が強い權力を握っていたと一般に言われている。また、同治帝の叔父恭親王奕訢が、軍機處に加え、アロー戦争後に新設された外交を管轄する中央官廳である總理衙門を首席大臣として長らく主宰し、皇太后を補佐していたと概説される。しかし、皇太后による政策決定に、恭親王をはじめとする軍機處・總理衙門の大臣がどのように関わっていたのか、また彼らと他の六部尚書・侍郎との関係の實際などについては、實證的に解明されているわけではない。

従来の研究では、清朝中央における政策決定過程を検討するにあたり、公開された公文書（皇帝の上諭、皇太后の懿旨、臣下の上奏文など）が主要な考察対象とされてきた。また外交政策を扱うものでは、公文書に加え、地方官の文集などに収められた、彼らと中央諸官廳との間で半公信の通信方式として使われた書簡類（函）と呼ばれる<sup>(2)</sup>も利用された。それにより、政策決定過程のうち公式の記録に残された部分を中心に多くの成果が生み出されるとともに、軍機處・總理衙門与李鴻章をはじめとする地方官とのやりとりの詳細が明らかにされてきた。<sup>(3)</sup>一方で筆者は、現在、朝廷の中樞にいた人物の日記や彼らの間で授受された書簡を用いて、公文書からは窺えない水面下の動きも含めた清朝中央の政策決定過程を復元し、それに分析を加えるという研究を進めている。<sup>(4)</sup>その結果、政策決定の舞臺裏、例えば原案を構想したのは誰か、政策決定に至るまでの過程でいかなる根回しや駆け引きがなされたか、誰がそれを主導したか等々に迫ることが、一定程度可能となった。そしてそこから、當時の政策決定過程において、皇太后の考えと臣下側のそれとを調整する主な手段として、皇太后に口頭で具申する召見、上奏文の提出、多數の中央官僚が参加する廷臣會議の三つが浮かび上がってきた。<sup>(5)</sup>

これを受け本稿では、垂簾聽政期の政策決定のあり方を考察する一環として、イリ問題の解決に向け、リヴァディア條約調印により死罪とされた崇厚を赦免し、ロシアとの再交渉に臨むという決定に到る過程（光緒六（一八八〇）年四―五月）を取りあげる。ここではまず、これまでと同様の方法で外交政策の決定過程を可能な限り復元する。そして、上記した三つの手段を念頭におきつつ、政策決定過程の舞臺裏を總理衙門大臣の活動に焦點をあて（當時は、全ての軍機大臣が總理衙門大臣を兼任）、分析することにした。これにより、中央・地方間のやりとりに比べ、未解明な部分が多く存在する清朝中央の政策決定過程が、具體像を伴うかたちで見えてくるだろう。

考察にあたっては、『王文韶日記』と『翁同龢日記』の二種類を、主要史料として使用する。王文韶は、咸豐二（一八五二）年の進士で、當時は軍機大臣・總理衙門大臣・戸部左侍郎を兼ねていた。その日記には、彼の職掌から、總理衙門大臣の動きならびに尙書・侍郎、各國の駐清公使との會談について記されている。一方の翁同龢は、咸豐六（一八五六）

年の狀元（科擧の首席合格者）で、軍機大臣・戸部尙書などを歴任した人物である。當時は工部尙書であると同時に、光緒帝の教育係である毓慶宮行走を務めていた。そしてこの日記には、彼の地位とも關係して、朝廷で起こった出來事が、ほぼ毎日書かれている。兩名の日記は、記述が簡略化されており、内容を十分に理解したうえでの分析に困難がつきまとう。しかし、王文韶・翁同龢それぞれの立場から同一の事象を記した部分が、日記中に存在する。そのため、これらと近年新たに出版された公文書ならびに個人の文集を併せて利用することで、總理衙門大臣や六部の尙書・侍郎をはじめとする、當時の清朝中樞にいた高級官僚等の動きを描出することが可能になると思われる。

## 第一章 崇厚の斷罪をめぐる動き

同治十（一八七二）年、ロシアがイリ地方を軍事占領する。これは、ヤークープ・ベクの征服活動や反亂の勃發など、新疆における大混亂の影響を受けてのものであった。その後ロシアは、清がイリ地方の秩序を維持できるようになれば、同地方から撤退するとの聲明を出す。一方の清では、陝西・甘肅兩省で起こっていた回民の蜂起を鎮壓した陝甘總督の左宗棠が、光緒元（一八七五）年に新疆經略へとのりだし、光緒三年までに、イリ地方を除く新疆全域を回復する。光緒五年、清はイリ地方がロシアに占領されている事態を解決するべく、左都御史の崇厚を全權大使として同國へ派遣し、彼の手によりリヴァディア條約が調印される。しかし、この條約は清側に著しく不利な内容であった。そのため、清朝中央は批准の拒否、さらには崇厚の斷罪へと傾き、兩國の關係は危機的状況となる。これに對して、イギリス・フランスが調停に入る。そして、欽差大臣の曾紀澤が再び交渉を行い、光緒七（一八八二）年にペテルブルク條約が締結される。

清朝中央がリヴァディア條約の批准を拒否してから、イギリス・フランスの調停を受け入れるまでの経緯については、これまで多くの研究がなされてきた。<sup>(1)</sup>それらが主に利用しているのは、『清季外交史料』や『李文忠公全集』<sup>(2)</sup>に收録された公文書および李鴻章（直隸總督兼北洋大臣）から總理衙門へ送られた書簡である。そこで本章では、先行研究をまとめつ

# 關 連 年 表

年 月 日	こ と が ら
同治元年（1862）	陝西・甘肅兩省で回民の反亂→後に、新疆全域へも擴大
同治三年（1864）	コーカンドの武將ヤークーブ・ベクが、新疆のカシュガル地方に侵入
同治五年（1866）	新疆で、回民の反亂
同治十年（1871）	ロシアのイリ占領
同治十二（1873）	左宗棠が陝西・甘肅兩省の反亂を平定
光緒元年（1875）	左宗棠、新疆經略へ →光緒三年までに、イリを除く新疆全域を回復
光緒五年（1879） 七月 十一～十二月	崇厚、ロシアとリヴァディア條約を締結→清朝中央は批准拒否 廷臣會議が開かれ、崇厚の斷罪が提案される →翌年、駐英公使曾紀澤を「出使俄國欽差大臣」に任命 ※十二月、歐米の駐清公使が崇厚の處分に對する申し入れ
光緒六年（1880） 正/二十三 四/十 四/十八 四/二十四 五/八 五/十一 五/十四 五/十九	上諭で、崇厚を「斬監候」に處すよう命じられる 駐清イギリス公使ウェードが、ロシアとの調停を提案 →李鴻章は十一日・十五日（① <b>李書簡</b> ）に總理衙門へ傳達 ② <b>總署書簡</b> （ウェードへの返信を添付）が送付される →③ <b>李書簡</b> で調停を促す フランス公使ブーレが、調停を提案 ※四月下旬、兩江總督劉坤一が、天津で李鴻章と密談 その後北京入りし、總理衙門に調停に應じるよう勧める 總理衙門、崇厚の減刑および調停の受け入れを上奏（正奏・片奏） 寶廷・黃體芳が崇厚の減刑に反對する上奏 廷臣會議の開催→主稿は崇厚の「減等」を提案／別奏十二件 曾紀澤に密諭を與えて再交渉へ→翌年、ペテルブルク條約締結

◎漢數字：舊曆、算用數字：新曆

※坂野1973等をもとに作成

つ、これらの史料から窺える動向を整理することにした。

光緒五年七月に崇厚が結んだリヴァディア條約の内容は、大きく次の四點にまとめられる。第一に、ロシアは清にイリ地方を返還する、第二に、清はロシアにイリ占領費五百萬ルーブルを支拂う、第三に、清はロシアに國境地方の領土を割譲する、第四に、ロシアは貿易上の特權を得る、である。しかし、このうち崇厚にあらじめ認められた權限の範圍内にあったのは、第一點と第二點のみだった。さらに第三點は、廣大な地域の割譲であり、清にはきわめて不利なものであった。そのため、總理衙門の請願を受けた兩皇太后は、イリ將軍や事情に明るい地方官に對して、崇厚とリヴァディア條約の扱いについて諮問する。その後、回答を寄せた李鴻章・左宗棠らの意見をふまえたうえで、崇厚が歸國して詳細を報告するのを待つて、條約の内容について朝廷が判斷し處理するという諭旨が降される。

このような状況のもと、十一月二十一日に大學士・六部・九卿・翰林院・詹事府の官や科道官（翰林院・詹事府の官や科道官）が參加する廷臣會議が開かれ、その結果として崇厚を罪に問うことが上奏される。そして十二月十日に、これと他の關連する上奏文とが、さらなる廷臣會議に附される。二度目の會議の參加者は、先のものとはやや異なり、親郡王・御前大臣・軍機大臣・總理衙門大臣・大學士・六部・九卿・都察院堂官であった。結果を記した上奏文は、光緒六年一月十日に提出される。その要點は、次の四點である。一點目は、領土は一切譲らない、二點目は、イリ全域を返還するならば占領費をロシアに支拂つてもよい、三點目は、通商特權は認めない、四點目は、洋務に詳しい大臣を派遣して再交渉させる、である。これにより、駐英公使の曾紀澤が「出使俄國欽差大臣」に任命され、ロシアに派遣されることになる。

これと並行して、光緒五年十二月二十七日に、崇厚が裁判にかけられる。一方、イギリス・フランス・アメリカ・ドイツの駐清公使は、十二月中に、總理衙門に對し崇厚の處分について慎重になるよう申し入れていた。しかし光緒六年一月二十三日、崇厚に死罪（斬監候）の判決がくだされる。この頃ロシアは係争地へ派兵し、艦隊を渤海灣に出動させていた。そして清も、新疆にいた軍の一部を國境に集結させ、沿海の防備を強化していた。以上から當時は、皇太后・臣下ともに

主戦に傾いていたことが看取される。

こうした情勢下の四月十日に、駐清イギリス公使ウェードが天津にて李鴻章と會い、ヴィクトリア女王の名で、崇厚の死罪を許し和平によりこの問題を解決するよう呼びかける。そして、自ら清とロシアとの間に立つて調停することを申し出る。これを受けた李鴻章は、四月十一日・十五日と續けて總理衙門へ書簡を送り、それに應じるよう勧める（ともに翌日着<sup>(9)</sup>。十五日のものを①李書簡と呼ぶ）。また四月二十四日に、新任の駐清フランス公使ブーレも李鴻章に、和平による解決を要求してくる。

李鴻章の書簡を受け取った總理衙門は、しばらく調停に對する自らの見解を示さずにいた。こうした中、新任の兩江總督兼南洋大臣の劉坤一は、天津で李鴻章と密談してから北京入りし、總理衙門に對して李鴻章と同意見であると述べる。加えて、ウェードから繰り返し調停を働きかけられた李鴻章が、さらなる書簡を總理衙門に送り、その受け入れを催促する<sup>(10)</sup>。そして五月四日には、劉坤一が總理衙門に、李鴻章からの三日附書簡を渡す<sup>(11)</sup>。兩者の進言を受けた總理衙門は、八日になってようやく、イギリス・フランス公使が崇厚の罪を許すよう求めており、李鴻章・劉坤一からも同様の請願があったことを上奏する。それは、正奏（奏文の本文）と片奏（正奏に同封して呈する附帶的奏文）の二種類からなっていた<sup>(12)</sup>。坂野正高は、これらを極めて重要な史料と指摘したうえで、その内容を要約している。それによると、正奏は四月以降の各國公使・李鴻章・劉坤一・ハート（總稅務司）の動きを詳しく述べ、片奏は他國へ使いたした使節を死罪にあてることが相手國への侮辱となり、開戦原因となることを主張するものであった。また雙方ともに、駐清ドイツ公使プラントが、陰からロシアをけしかけていることが記され、特に片奏にはヴィクトリア女王の言を無視すればイギリスを辱めることにもなると書かれていた<sup>(13)</sup>。

總理衙門が、崇厚の斷罪から調停受け入れへと政策轉換するまでの経過については、他の先行研究でも、總理衙門の正奏と片奏、ならびに正奏に引用されている李鴻章からの書簡を利用して、坂野とほぼ同様のまとめがなされている。ただ

し、これら二種類の上奏文は、總理衙門と李鴻章とのやり取りや各國の駐清公使の動向を詳しく説明する一方で、總理衙門が政策轉換にふみきった時期やその背景、轉換から五月八日の上奏に至るまでのいきさつについては言及していない。そのため、四月中旬に李鴻章が總理衙門へ二通の書簡を送ってから、五月八日上奏文が提出されるまでの清朝中央における具體的な動きについては、いまだ明らかになっていない。

五月十一日、總理衙門の請願に對して、清議の一員であつた黃體芳と寶廷（ともに詹事府少詹事）が、崇厚の減刑に反對する上奏を行う。<sup>(15)</sup> これを受けた兩皇太后は、總理衙門と兩名の上奏文を廷臣會議に附し、十四日にそれが開催される。今回の参加者は、王公・大學士・六部・九卿・翰林院侍讀學士・清議の一人とされる<sup>(16)</sup> が加わっていた。會議で議論された内容は未詳であるが、結果的には複數の上奏文が提出される。上奏文は禮親王を筆頭に多くの王公・官僚が署名した主稿に加え、醇親王などによる別奏が十二件あつた。<sup>(17)</sup> このうち確認されるのは、管見の限り六件である（註<sup>(17)</sup>参照）。その内容を大別すると、次の四つになる。第一は、主稿である。これは崇厚の減刑を求める一方で、彼の監禁については書かれていない。第二は、醇親王のもの、ならびに胡聘之（内閣侍讀學士）・王先謙（國子監祭酒）が連名で出したものである。これらは暫定的に死罪を免じるが、崇厚を監禁しておくべきであると明示している。第三は、鍾佩賢（太僕寺少卿）のもので、總理衙門の請願する減刑はやむを得ないとしつつも、まずはイギリス・フランスに減刑の用意があることを傳えて、様子を見よというものである。第四は、王仁堪等によるものと張之洞のもので、減刑に反對している。<sup>(18)</sup>

このように参加者の中には、張之洞のごとく調停に反對する強硬論も一部見られたが、大勢はイギリス・フランスの要求を入れて崇厚の罪を減等したうえで、リヴァディア條約改定へ向け再交渉に入るといふ意見であつた。この結果を受け、五月十九日に懿旨が降され、それが即刻、曾紀澤にも傳えられる。<sup>(19)</sup> その内容は、崇厚はとりあえず斬監候の罪を免じて監禁しておき、再交渉の様子をみて、改めて懿旨を降すというものだつた（崇厚は曾紀澤からの要請で、七月七日に釋放される）。



これについて趙春晨は、兩皇太后が下した最終的な決定は各提案を折衷するものだったとしている。<sup>(20)</sup>

リヴァディア條約の批准拒否から、イギリス・フランスの調停を受け入れるという政策決定に到るまでの経緯を、先行研究に據りつつ整理すると、以上のようになる。そこでは、總理衙門がいつ、どのように政策轉換への舵を切ったのか、そして調停受け入れを實現させるために、いかなる動きを見せたのかという點が未解決の問題として指摘できる。また、廷臣會議での具體的な議論の詳細も、明らかにされていない。以下の章では、これらについて考察していくことにしよう。

## 第二章 英佛による平和的解決の要求と總理衙門

### 第一節 調停の提案と總理衙門の對應

四月十六日、①李書簡を受け取った總理衙門は、調停を受け入れるか否かの回答を迫られることになる。その時の總理衙門の様子について、醇親王は四月十八日附の上奏文に、次のように記している。

史料1 『光緒朝硃批奏摺』第一一一輯、中華書局、五七〇～五七一頁、四三一文書<sup>(21)</sup>

(前略) 竊臣今早進內恭請慈安後、寶鑒等約臣至直房、告以恭親王因福晉病勢沈重、未能入直。(中略) 總理衙門王大臣因崇厚一事聖怒莫測、不敢於未報大安以前奏聞。而威妥瑪定於二十日聽信、又無以答覆、寶鑒等極爲着急、向臣商酌。臣告以日內尙欲往候恭親王、俟見面商訂、並云此事總以操縱出自皇太后、方成堂堂正正之勢、不可露出爲外洋求請痕跡方妥、寶鑒等亦深以爲然。臣恐總理衙門三五日內具奏皇太后、未知原委、致觸聖怒。是以先行奏聞。(中略) 此事若出自俄人要求於中國、體制實屬有碍、雖因此開仗、亦所甘心。今英人從旁調停、必係爲俄所使、故意裝此局面、則我國似不妨稍事權變、有益於時事、無損於體統。(後略)

(前略) 私が今朝、朝廷に參じて皇太后のご機嫌をうかがった後、「總理衙門大臣の」寶鑒たちが私を招いて直房に行<sup>(22)</sup>

き、「そこで彼らが」言うには恭親王は正妻の病状が悪いため勤務できないとのことであった。「中略…李鴻章から調停に關する知らせがあったことが説明される」總理衙門大臣は、崇厚の一件についての皇太后の怒りが測り知れないため、「慈禧太后が」健康でない状況では、決して上奏いたしておりません。ウエードは「四月」二十日を「期限に」回答を待つとしており、また「總理衙門大臣は、それへの」回答を持ち合わせていないので、寶鑒たちは非常に氣をもらんで、私に相談をしました。私は近日中に、やはり恭親王を訪ね、「回答について」直接會つて話し合つて決めるのを待ちたい「と言ひ」、さらにこの件は、結局は裁決が皇太后から出て、はじめて公明正大な状態となるのであつて、外國の要求のため「調停に應じる」ということを表に出すべきでないのが妥當であると言つと、寶鑒たちも、深く同意しました。私は、總理衙門が數日内に皇太后へ上奏するのに、「彼らが」事の顛末を分かつておらず、その怒りに觸れるのを恐れております。そこで「總理衙門より」先に、上奏いたしました。「中略」「調停」の事は、もしロシア人から中國に要求があり、「それが清の」體制にとつて本當に妨げがあるならば、「要求を拒否する」ことにより開戦に至るとしても、望むところでありませう。現在イギリス人は間に立つて調停しようとしています。私が方もしばらく臨機應變に對應利用されているのに、故意にこのような體裁を装っているの、で、「調停については」我が方もしばらく臨機應變に對應することを妨げられず、時事に利益があり、體制を損なうことはありません。（後略）

十八日に醇親王は、寶鑒ら總理衙門大臣の要請で彼らと話し合うことになる。そこでの議題は、李鴻章により傳えられた、イギリスがロシアとの間の調停役になつてもよいと提案してきたことについてである。この時、首席總理衙門大臣の恭親王は、正妻の病狀惡化のため話し合いに出てこれられない状態にあつた。その影響もあつてか、残る大臣の寶鑒らは、調停案を受け入れるか否かを判斷しかねていた。そして①李書簡の到着から二日が経過しているにもかかわらず、寶鑒らは調停の提案に關する兩皇太后への報告をしていなかった。しかし、ウエードへの回答期限は、二日後の二十日と迫っていた。そこで彼らは、醇親王に相談する。醇親王は、近日中に恭親王を訪ねて彼と評議してから判斷を示すこと、最終的な受け

入れの可否は皇太后によって決定されるべきであることを主張する。つまり、早く恭親王と會つて總理衙門としての見解をまとめ、速やかに上奏したうえて、皇太后の懿旨をもとに回答するよう勧めたのである。それに對して寶鑒らは、大いに納得する。そして總理衙門が數日内に、これまでの經緯と對應策について上奏文を提出することになる。

寶鑒らと別れた後、醇親王は同日中に上奏文を提出する（史料1）。これには、數日内に總理衙門大臣が上奏する豫定であることが、わざわざ記されている。ここから醇親王には、彼らが上奏することで兩皇太后の怒りを買わないですむよう、情報的事前に彼女らの耳に入れる目的があつたと推測できる。そして醇親王は、イギリスの背後にロシアがいることを指摘しつつも、イギリスの態度から判斷して、調停に關して自分たちも臨機應變に對處することが可能であり利があると記している。この内容が、事前に寶鑒らに知らされていたかは、史料に明記されていない。しかし寶鑒らは、恭親王不在の影響でイギリスの提案に對する判斷をしかねており、それを打開すべく醇親王に相談を持ちかけていた。そして寶鑒らは、納得のうえて話し合いを終えている。したがつて醇親王が、調停に對する自らの考えを提示していた蓋然性が高い。以上の點から醇親王は、相談を受けた際、調停に關する見通しを述べ、それに納得した寶鑒らとの共通認識のもとで、上奏に及んだと考えられよう。<sup>(24)</sup>

それでは寶鑒ら總理衙門大臣は、醇親王との話し合いを経て、いかなる行動を取つたのだろうか。彼らが醇親王に相談するきっかけとなつた、十六日の①李書簡への返信（②總署書簡と呼ぶ）を通じて検討してみよう。②總署書簡そのものは、管見の限り見當たらなない。しかし、それに對して李鴻章が出した十九日附の返信（③李書簡と呼ぶ）から、②總署書簡はウエードに宛てた返書を添附して、十八日に出發していたことが分かる。<sup>(25)</sup>十八日は、寶鑒らが醇親王と話し合つた日であるが、②總署書簡の發送時刻は記録されていない。そのため、李鴻章・ウエードに送られた書簡の内容と、醇親王・總理衙門大臣間での話し合いとの關係が不明瞭である。しかし、醇親王に相談した時点で調停受け入れの可否を判斷しかねていた寶鑒らが、それよりも前に自發的に李鴻章へ返送したとは考えにくい。また、十八日の段階でウエードへの回答期限ま

で二日間の餘裕があり、返信を送らざるをえない状況にあったわけでもない。したがって、發送は相談の後、つまり醇親王との相談をふまえて②**總署書簡**が作成されたとみて間違いないだろう。

ウエードへの返書の内容については、③**李書簡**から一定程度知ることができる。そこには、轉送された返書を讀んだウエードが、李鴻章へ語った言葉が次のごとく記されている。

**史料2『李鴻章全集』**三十二、信函四「復總署 委婉代達總署回復威使信」光緒六年四月十九日（一八八〇年五月二十七日）、安徽教育出版社、五五一頁

（前略）中朝既一意推延機會、殊屬可惜。我擬不再催促、靜候總署續信如何回復、但若多展時日、於事無濟、即英廷亦難爲力、只有先據總署復函延緩之意、電報本國（後略）

（前略）中國が既に一心に「調停の」時機を遅らせてしまったのは、非常に残念なことです。私（ウエード）は、もう一度「調停を」催促「するようなことは」せず、靜かに總理衙門のさらなる書簡がどのように返答してくるか待ちたい「と思います。」ただ多くの日時を引き延ばしても、「解決への」役には立たず、「そうなれば」イギリス本國も力になることが難しくなるので、ただ受け取った總理衙門の返信で猶豫を「求めている」ことを、本國に電報するほかにありません「とあった。」（後略）

史料から、總理衙門がウエードに回答期限を延ばすよう、添附書簡で求めていたことが分かる。それに對しウエードは、回答の延期を遺憾としつつも、總理衙門からのさらなる返書等待つと李鴻章に伝える。つまり寶鑒らは、十八日のウエードに宛てた書簡では、調停に關する回答を保留して具體的な結論を示すことを避け、期限の猶豫を求めたのである。これは**史料1**に見られた、懿旨に基づいて回答すべきとする醇親王の考えを實行に移すのに必要な措置である。したがって總理衙門の回答の背景には、先の醇親王による提案を実施する、すなわち恭親王へ事態を報告し、兩皇太后から懿旨をもらうための時間を、あらかじめ確保しておく目的があったと判斷できる。

本節の考察から、十八日の経緯は、次のようになる。まず寶鋆らが醇親王に、李鴻章から知らされた調停について相談を持ちかける。假に調停を進めるとなると、總理衙門が皇太后に上奏し、それを認める懿旨をもらう必要が出てくる。しかし總理衙門は、これまで調停に關する報告を皇太后にしておらず、加えて首席大臣の恭親王との合意もなかった。そのため、次に寶鋆らは、ウエードへ回答期限の猶豫を求めて時間の確保に努める。一方の醇親王は、寶鋆らが恭親王も含めた總理衙門としての見解をまとめて請願するのに備え、皇太后の耳に情報を入れる。ここから、回答を引き延ばして時間を稼ぎつつ、調停受け入れの可能性を念頭において行動するという方針が、醇親王の意見をもとに、彼と恭親王を除く總理衙門大臣による十八日の話し合いにおいて固まったと考えられるのである。

## 第二節 總理衙門の政策轉換と皇太后

先述したごとく、四月十九日以降も、李鴻章は總理衙門に書簡を送り、調停に應じるよう促し續ける。また、李鴻章との面會を経て上京した劉坤一も、二十八日以降、總理衙門大臣と會談を重ね、彼らを説得している。そして總理衙門は、五月八日になってようやく、調停を受け入れるべきとする上奏文を提出する。それでは恭親王を含めた總理衙門大臣は、いつ調停へと政策を轉換するという見解をまとめたのだろうか。それに關して總理衙門大臣の王文韶（軍機大臣も兼任）が、日記に次のような記述を残している。

**史料3 『王文韶日記』** 光緒六年五月初五日（一八八〇年六月十二日）

（前略）午後未出門、手擬疏稿一件（中俄交涉事）、總署密片。（後略）

（前略）午後は外出せず、上奏文の草稿一件（中露交渉のこと）、總理衙門の密片（の草稿）を手ずから作成した。（後略）

この日の午後、王文韶は「疏稿」と「密片」という二種類の上奏文を作成している。まず「疏稿」は、史料からロシアと

の交渉に關するものであることが分かる。しかし、誰の名義で出されるものなのかは明示されていない。一方、先に述べたごとく五月八日に、總理衙門がロシアとの交渉についての上奏文を提出している。これらの點と王文韶が總理衙門大臣であつたことから、「疏稿」は八日に總理衙門の名義で出される上奏文の草稿であつたと推測できる。次に「密片」は、日記の記載から總理衙門が提出するものであることが分かるが、内容は不明である。他方、前述したように、總理衙門が八日にイギリス・フランスによる調停の提案について片奏を提出している。ここから、王文韶が作成していた「密片」の内容は、ロシアとの交渉に關するものであつたと推察される。したがって王文韶は、イギリス・フランスがロシアとの調停を提案してきたことに對して、總理衙門の名義で出す二種類の上奏文（正奏・片奏）を同時に作成していたと考えられる。

王文韶が作成した二種類の上奏文は、いずれも恭親王を含めて署名され、總理衙門の上奏として扱われている（註（12）参照）。ここから、少なくとも五日の午前中までに、調停に對する總理衙門としての見解がまとまっていたと推察される。また劉坤一が、前述した李鴻章からの書簡を總理衙門大臣に渡し調停を促したのは四日なので、この時點では、まだ見解がまとまっていなかつたはずである。以上の點より、總理衙門大臣が調停を受け入れることで意見の一致をみるのは、四日から五日午前にかけてであつたと判斷できる。

これら上奏文の提出は、直ちにはなされず、さらに三日の時を経て行われる。上奏日時先の延ばしは、ウェードへの回答の遅れにつながり、調停の芽を摘んでしまふ危険をはらんだ行爲と言える。それにもかかわらず、總理衙門がこのような行動を取った背景には、何があつたのだろうか。

史料 4 『王文韶日記』 光緒六年五月初七日（一八八〇年六月十四日）

（前略）至總署飯、威妥瑪來。邸及各堂咸集，論中俄交涉事。英國意在調停也。（後略）

（前略）總理衙門に行き食事を取っていると、ウェードがやってきた。「恭」親王および「總理衙門大臣を務める」六部

尙書・侍郎らが皆集まり、中露交渉について話し合った。イギリスの考えは、調停にある。(後略)

五月七日、イギリス公使のウェードが、總理衙門にやってくる。<sup>(27)</sup>そして彼を交えた會談がなされる。日記中の記述を文字通り解釋すると、清側の出席者は「邸」＝親王・郡王、「堂」＝堂官、すなわち六部の尙書・侍郎や諸寺の卿、その他衙門の長官となる。しかし全ての親王・郡王や尙書・侍郎らを集めるとなると、尙書・侍郎だけでも三十六名となり、とても外國の公使と話し合いができる状況ではなくなる。他方、外交を掌る總理衙門は、首席大臣の恭親王および六部の尙書・侍郎らで構成されている。<sup>(28)</sup>したがって、ここでの「邸及各堂」とは、譯出したごとく、總理衙門大臣と解して間違いないだろう。

この會談で話し合われたのは、史料中に書かれている通り、ロシアとの交渉についてである。そして、先に調停の申し入れへの回答猶豫を求めていた總理衙門は、ウェードからイギリスが調停に入る意思を變えていないことを確認している。加えて會談は、王文韶が總理衙門名義で提出豫定である二種類の上奏文の草稿を作った後に行われている。これらの点から、總理衙門は崇厚の赦免と調停受け入れを奏請するにあたり、それが五月七日の時点で條件的に實現可能なもののなか、ウェードから確認を取っていたと考えられる。また同時に、これが草案作成から提出までに時間をかけた理由だったと判断できよう。

翌八日、總理衙門は作成済みであった二種類の上奏文を提出する。その二日後に、王文韶は次のような動きを見せる。  
史料5 『王文韶日記』 光緒六年五月初十日(一八八〇年六月十七日)

(前略) 入對四刻許、慈禧太后缺安、自二月初二日起至本日始召對一次、以總署封事也、英明天縱出人意表、惟有欽服而已。(中略) 午後到總署、偕經師・芝庵・伯音赴法館答寶海、並至英館候威安瑪。

(前略) 召見を受けて奉答すること一時間ほど「であった。」慈禧太后の御病氣は、二月二日からであり、今日になつてようやく召見で奉答する「機會が」一度「あった。それは」總理衙門の上奏についてであり、「その判断は」賢明かつ

すばらしく、他人には思いもよらないもので、ただ謹んで従うのみである。(中略) 午後(總理衙門へ行き、經師(沈桂芬)・芝庵(麟書)・伯音(夏家鎬)と共にフランス公使館に赴きブルーレに回答し、さらにイギリス公使館を訪ねてウエードを待った。

十日、久しぶりに慈禧太后が出てきて、兩皇太后そろつての召見が行われる。そこで王文韶は、總理衙門が八日に提出した上奏文について、慈禧太后の諮問に答えている。ここでの諮問は、特に對象が示されていないので、軍機大臣に對する日常の召見の中で行われていた可能性が高い<sup>(29)</sup>。そして總理衙門の上奏文を起草したのは、雙方の大臣を兼務する王文韶自身であるから、彼の回答はその請願内容と同じであつたはずである。また王文韶は、その後慈禧太后が下した判斷を褒めたたえている。したがって、ここで慈禧太后を加えた兩皇太后が、總理衙門の奏請を認めたと考えられる。

午後(王文韶は、同僚の總理衙門大臣である沈桂芬・麟書・夏家鎬とともに(王文韶・沈桂芬は、軍機大臣を兼任)、フランス公使館へ行きブルーレに何らかの回答を行う。次いでイギリス公使館を訪問してウエードとも面會したようである。フランス・イギリスは、總理衙門に調停受け入れを迫っていた國である。ゆえに史料には明記されていないが、ここで傳達された内容もロシアとの調停に關係していた蓋然性が高い。また、七日にウエードとの會談を行い、八日に二種類の上奏文を提出していることから、すでに總理衙門が調停を受け入れる意志を固めていたことは明らかである。一方、この日の段階で、八日の上奏に對する兩皇太后の懿旨は降されていない。しかし當時の外交においては、先に召見の場で實質的な決定がなされ、懿旨が出る前に、それを前提とした動きが見られる事例が存在する。<sup>(30)</sup> 以上の點から、兩皇太后が、十日午前の召見の場で調停を許可し、それが午後(フランス・イギリス兩國へ傳達されたと推測できる。

しかし十一日になり、狀況が一變する。それについて王文韶は、次のように記している。

史料6 『王文韶日記』 光緒六年五月十一日(一八八〇年六月十八日)

(前略) 昨議中變、大局不堪設想、奈何奈何。午後到總署、巴蘭德來。訪叔平談時事。(後略)



（前略）昨日の議論（＝調停への政策轉換）が「皇太后が懿旨を出さず、廷臣會議を開くことになったために」途中で變わってしまい、大局は想像にたえず、どうしたものであろうか。午後に總理衙門へ行くと、「ドイツ公使の」ブランドがやってきた。叔平（翁同龢）を訪ねて時事について話し合った。（後略）

また、この日に王文韶が會つたとする翁同龢は、日記に次のような記載を残している。

**史料7**『翁同龢日記』光緒六年庚辰五月十一日（一八八〇年六月十八日）

（前略）是日寶廷・黃體芳各有封事。（中略）王夔石來述近日轉圜事、上意不決、將下廷議。（後略）

（前略）この日、寶廷・黃體芳がそれぞれ上奏した。（中略）王夔石（王文韶）が来て、近日の「調停への政策」轉換について述べるには、皇太后の意は決せず、廷臣會議に附されようとしている「とのことである」。（後略）

**史料6と史料7**をもとに、十一日の動きをまとめてみよう。この日、清議の一員である寶廷・黃體芳により上奏文が提出される。そして兩皇太后は、調停への政策轉換を許可する決断をしたことを傳える懿旨を降さず、それについて廷臣會議を開催して話し合うよう命じた。つまり、前日までの意思を翻したのである。そのため、すでに各國行使とも連絡を取りつつ準備を進めていた王文韶は、翁同龢に會い事態の急を告げる。

それでは皇太后が、政策轉換を許す降旨を見送った背景には、何があつたのだろうか。前述のごとく、實際に提出された寶廷・黃體芳の上奏内容は崇厚の罪を緩めて調停を受け入れようとする動きに反對するものであつた。これは、調停を主張する總理衙門の意見と、眞つ向から對立するものである。一方、兩皇太后の元來の意思は、崇厚を死罪とすることであつた。以上の點から、今回のような事態に至った背景には、寶廷・黃體芳の上奏をきっかけに、元來の意思を曲げて崇厚を免罪し、總理衙門の勧める調停を受け入れるという決断を下すのに、皇太后の心が搖らぎはじめていたことがあつたと推察される。

以上のように、總理衙門は政策を轉換した後、上奏と召見を利用して兩皇太后を説得し、調停を進めるといふ政策決定

に持ち込もうとしたと考えられる。しかし、一度はそれを認めた兩皇太后が、寶廷・黃體芳による反對をきっかけに意思を翻したために、廷臣會議が開催されることになったのである。

### 第三章 廷臣會議と皇太后の政策決定

#### 第一節 主稿の原案作成

五月十二日、廷臣會議の開催を命じる懿旨が降される。<sup>(31)</sup>その後、會議は十四日の午前八時に内閣大堂で行うこと、その結果は十六日に上奏することが、参加者に順次伝えられていく。<sup>(32)</sup>そして主稿、すなわち廷臣會議の結果を記す上奏文を作成するのは内閣となる。<sup>(33)</sup>降旨がなされた十二日の様子を、翁同龢は次のように記している。

**史料 8 『翁同龢日記』** 光緒六年庚辰五月十二日（一八八〇年六月十九日）

（前略）是日軍機一起。全師來、知今日奉旨、總理衙門摺片並寶廷・黃體芳摺交王大臣・大學士・六部・九卿・翰詹科道會同妥議具奏、醇親王亦著會議。訪蔭軒、蔭軒意以轉圜爲是。

（前略）この日、軍機大臣の召見があつた。全師（全慶）がやってきて、今日「軍機大臣が」受け取つた懿旨には、總理衙門の奏摺（正奏）と片奏ならびに寶廷・黃體芳の各上奏文は、王大臣・大學士・六部・九卿・翰詹科道に送つて皆で話し合つたうえで上奏させ、醇親王も會議「に参加させよと書かれていることを」知つた。蔭軒（徐桐）を訪ねると、彼の意見は「調停を受け入れる政策」轉換を是とするものであつた。

この日、軍機大臣が召見され、廷臣會議の開催を命じた懿旨を受け取る。前日に王文韶から情報を得ていた翁同龢は、正式な懿旨の内容を全慶から聞かされる。これには、全慶が翁同龢の同僚である滿缺の工部尙書と、廷臣會議の結果を上奏するように命じられた内閣の大學士とを兼任していたことが関係しているのだろう。懿旨の具體的な内容は、總理衙門が五

表 廷臣會議前の翁同龢・王文韶の動き

日 付	翁 同 龢	王 文 韶
五月十一日		ブランドが總理衙門に來訪
	兩者會談（王文韶が訪問）	
	廣壽（兵部尙書）が來訪	
五月十二日	全慶（工部尙書）が來訪	朱智（兵部右侍郎）を訪問
	徐桐（禮部尙書）を訪問	
五月十三日	黃體芳（少詹事）が來訪	
	朱智（兵部右侍郎）が來訪	朱智（兵部右侍郎）が來訪
	兩者會談（翁同龢が訪問）	
	廣壽（兵部尙書）を訪問	

典 據：『翁同龢日記』『王文韶日記』より作成

月八日に出した正奏と片奏、寶廷・黃體芳が十一日にそれぞれ提出した上奏文の計四本について議論すること、會議には醇親王も参加することであった。これを受けた翁同龢は、禮部尙書の徐桐と會談する。そして、徐桐が調停受け入れへの政策轉換を支持していることを知る。

ここから次の二點が分かる。第一は、廷臣會議に附されたのが、調停の受け入れを主張する總理衙門の上奏文二本と、それに反対する清議の二本であったことである。これは、會議における構圖が、懿旨のうえでは調停受け入れの可否をめぐる總理衙門の意見と清議のそれであったことを意味する。第二は、徐桐が懿旨の出された当日に、早くも政策轉換、すなわち調停受け入れに賛成する意思を表明していることである。徐桐が禮部尙書だったこと、政策轉換が總理衙門の主張であったことから、十二日の段階ですでに、總理衙門が廷臣會議に向け臣下側の上層部への根回しを進め、彼らの間で意思統一がなされつつあったと推察される。ここで徐桐の考えを確認している工部尙書の翁同龢が、前日に總理衙門大臣の王文韶と意見を交換していたことも（史料6・史料7）、その傍證となろう。

廷臣會議の参加者による動きは、翁同龢と王文韶の日記中に、他にも確認される。上の表は、王文韶から翁同龢へ廷臣會議の開催が知らされた十一日から、それが開かれる前日の十三日までに、兩名が出入りした場所および會った人物をまとめたものである。それらは大きく、四つに分類できる。第一に、王文韶

が大臣として通っている總理衙門である。彼の日記には、十一日に駐清ドイツ公使のプラントがやってきたこと（史料6）を除き、そこで何をしていったのか記されていない。しかし前述のごとく、プラントはロシアとの調停に関わっていた點、王文韶が十一日に翁同龢との會談の際に廷臣會議の話題を出している點から（史料7）、總理衙門大臣同士でも廷臣會議について話し合いがなされていたと推測できる。第二に、王文韶・翁同龢の間の往來である。これは史料7に記される通り、廷臣會議に關係している。

第三に、翁同龢が會った他の尙書・侍郎である。このうち、十二日に訪問を受けた工部尙書の全慶（内閣大學士を兼任）からは、先述のごとく廷臣會議について知らされている。また、同日に會談した禮部尙書の徐桐からは、調停を進めるべきとする意思を確認している（史料8）。翁同龢の日記に、これ以上の詳細な記述は見られないが、ここでは廣壽・全慶・徐桐・朱智の四人が、會議の様子を記した後掲史料9にも登場する點、朱智は王文韶にも二度會いに行っている點を注意しておきたい。第四に、翁同龢を訪ねている黃體芳である。この訪問は廷臣會議の前日に行われているので、その目的が廷臣會議と關係していた可能性はある。しかし『翁同龢日記』に、それを示唆する記載は見られない。また、廷臣會議で両者が協力した様子も、管見の史料からは窺えない。したがって、この會談は、廷臣會議での議論にほとんど影響を與えなかったと思われる。

それでは、彼らは何を目的に會っていたのだろうか。廷臣會議の参加者は、六部の尙書・侍郎だけでも三十六名、九卿科道だと百名以上になる。このような大人數で、會議の當日に一から議論して結論を出すのは難しいと思われる。したがって、あらかじめたき臺となる原案が準備され、當日はそれをもとに話し合っていた可能性が高い。ここで原案を用意していたと想定できるのは、主稿を作成する内閣である。當時の内閣には、在京の大學士が四人いた。そのうち寶鋆と沈桂芬の二名は、總理衙門大臣でもあった（軍機大臣も兼任<sup>35</sup>）。そのため、兩名を含めた内閣大學士が原案の作成にあたり、これまで本事業に関わってきた大學士でない總理衙門大臣に助力を求めているとしても不思議はない。換言すると、總理

衙門大臣にとっては、彼らの統一見解を原案に盛り込むことが、十分可能な状況にあったといふことである。<sup>(36)</sup>そして總理衙門大臣の見解、すなわち廷臣會議に附された五月八日附の二種類の上奏文を起草したのは王文韶であつた。以上の點から、廷臣會議で提示する原案を練るに際し、内閣は總理衙門と協力することになつたと考えられる。そして表に見られる會合は、それに加わつた王文韶が中心的な役割を擔うことになり、翁同龢の助けを借りつつ原案作りを進めた結果だつたと推測できよう。

## 第二節 廷臣會議での議論と調停の許可

十四日、廷臣會議が開催される。そこでの様子を、翁同龢は次のように書いてゐる。

**史料9** 『翁同龢日記』 光緒六年庚辰五月十四日（一八八〇年六月二十一日）

（前略）詣内閣會議（定辰刻到、巳正）。王公畢集、全師領銜摺請如所請、群公多畫者、徐・廣・童・殷・潘皆嫌措詞未湛、因邀至別室改之。余與伯寅粗擬一稿、殷・童兩君以爲宜加監禁、朱敏生固爭、以爲與辦法有礙、遂刪之。時巳午正、大堂擁擠。遂出、不復入内。（後略）

（前略）内閣へ行つて會議をした。（辰刻に來るよう定められていたが、巳刻「に始まつた」。）王公がみな集まると、全師（全慶）は「禮親王」領銜摺によつて「原案が」請願している通りに「上奏することを参加者に」求め、多くの参加者が署名しようとしたが、徐「桐」・廣「壽」・童「華」・殷「兆鏞」・潘「祖蔭」はみな言葉づかいが精緻でないのを嫌い、そのため「彼らを」むかえて別室に行き文章を改めた。私（翁同龢）と伯寅（潘祖蔭）が荒削りの文案を作ると、殷「兆鏞」・童「華」の二人は監禁「の語」を加えるのがよいとしたが、朱敏生（朱智）は自説を曲げず、「ロシアと交渉を進めるうえで」手を打つのに妨げになるとして、結局これを削ることになった。時はすでに正午となり、内閣大堂は込み合っている。ついに退出して、再び内閣に入らなかつた。（後略）

廷臣會議では、まず提示された主稿の原案について内閣大學士の全慶が、そのままの形での上奏を求め、多くの参加者も彼の意見に賛同する。これに對して、徐桐・廣壽・童華（左都御史）・殷兆鏞（禮部右侍郎）・潘祖蔭（刑部尚書）の五名が、字句に問題ありとしたため、彼らと別室に行くことになる。そこで翁同龢と潘祖蔭が荒削りの新文案を作るが、新文案に對しても、注文がつけられる。それは童華・殷兆鏞によるものであった。二人は、崇厚の罪を暫定的に許してロシアとの交渉に入ることは構わないが、その間は刑を執行せずに崇厚を「監禁」しておくという文言を明示すべきであると主張したのである。しかし朱智が、「監禁」の語を加えることは、ロシアとの交渉の妨げになると反對したために、最終的には削除されることになる。こうして、ひとまず廷臣會議の結果としての上奏文が完成する。<sup>(37)</sup>ここから、次の三點が分かる。第一に、廷臣會議では大枠として、もともと總理衙門が主張していた調停の受け入れという方向で話が進んだことである。第二に、最初に提示された主稿の原案には、「監禁」の語がなかったことである。第三は、朱智が「監禁」の語を入れることに強く反對していることである。

ここで、會議前の原案作成と廷臣會議における新文案作成までの流れとの關係を整理してみよう。原案を起草する過程において、その中心にいたと目される王文韶が、總理衙門大臣以外に會っていた人物が二人いる（表参照）。まず翁同龢であるが、彼には五月十一日に、王文韶が自ら出向いて話し合っていた。そこでは王文韶が、頭を悩ませていた廷臣會議の開催を話題にあげていた（史料6・史料7）。そして十三日にも、王文韶は翁同龢の訪問を受けていた。また翁同龢は、廷臣會議での新文案作成にも携わっている。ここから、原案起草の段階および廷臣會議での修正に、翁同龢が関わっていたことが分かる。<sup>(38)</sup>次に朱智は、廷臣會議の前日に、王文韶・翁同龢の雙方を訪ねていた。彼は廷臣會議において、「監禁」の語のない原案には何の注文もつけず、童華・殷兆鏞がそれを付け加えるよう主張したことに對して反論している。また、會議での議論の様子からは、翁同龢や總理衙門大臣が、「監禁」の語の有無にこだわっている様子は窺えない。したがって、主稿の原案に「監禁」の語が見えない背景には、朱智の意見および廷臣會議前の彼の行動が存在していたと推測でき

よう。

この他、翁同龢が廷臣會議の前に會っていた人物として、全慶・徐桐・廣壽がいた。このうち全慶は、會議で原案の支持を参加者に求めていた。また彼は、主稿を作成する内閣の大學士であった。よって全慶も、原案作りの中心にいた一人であったと考えられる。他方、徐桐・廣壽は、廷臣會議中に内容の大きな變更は主張していないが、原案の字句に不満を見せている。ここから兩名は、原案作成の中心にいて直接起草に携わったわけではないが、事前に翁同龢からその内容を知らされ、相談を受けていたと判断できる。

翁同龢は、廷臣會議の會場から退出した後のことについて、**史料9**の後續部分に次のごとく記している。

**史料10** 『翁同龢日記』光緒六年庚辰五月十四日（一八八〇年六月二十一日）

（前略）訪蘭孫不值、晤伯寅。歸東華寓、則興侍讀傳全師諭、以摺底增數字見商、遂詣全師酌定而歸、乏極恨極、恨有慚於清議、無補於大局也。月赤。香濤奉特旨與議、余與商。伊以爲十八條可全從、減罪臣之議、則不可從、眞高論哉。惇親王另議。錢（湘吟）・錫（度卿）亦似有另議。祁子禾・胡聘之・王先謙・孔憲毅・李璠・鍾佩賢・鄭慶麟……別議、臣工中凡十人。

（前略）蘭孫（李鴻藻）を訪ねたが會えず、伯寅（潘祖蔭）と會った。東華寓に歸ると、興侍讀が全師（全慶）の言葉を傳えてきて、上奏文の草稿の字數を増やすことについて會つて相談したいとのことだったので、全師（全慶）のところに行き「文章を」斟酌して確定し歸つて來た。疲れも恨みも極まっている。清議に恥じ入って「字數を増やした」ところで、大勢には何の影響もないことを残念に思う。月が赤い。香濤（張之洞）が「廷臣會議に参加して」議論するよう特旨を受けており、私はともに話し合った。彼は、「すでに結んだリヴァディア條約の」十八條すべてに従うべきであつて、「崇厚の」罪を軽くする議論に従うべきでないと「考えているが」、誠に高論である。惇親王は別意見を上奏する。錢湘吟（錢寶廉）・錫度卿（錫珍）も別に上奏するようである。「他に」祁子禾・胡聘之・王先謙・孔憲毅・李璠・鍾佩

賢・鄭慶麟……別途上奏するのは、臣下中で全十人である。

新文案が完成し内閣を退出した翁同龢は、面會できなかったが軍機大臣の李鴻藻を訪問し、さらに潘祖蔭とも會っている。そこへ全慶の使いがやってくる。結局、翁同龢は彼の所へ行き、再び上奏文の文面を手直しすることになったのである。それを終えた後、翁同龢は疲れを感じつつ、清議の主張を入れての修正は、大局に影響を与えないとしている。ここから新文案の修正が、清議と關係していたことが窺える。また複数の人物が、別奏を豫定していたようである。つまり、廷臣會議中の修正を経てもなお、主稿に署名していない者が一定程度いたということである。これらの點から翁同龢は、主稿への署名に應じない者たちへ配慮し、一人でも多くの賛同を得るべく、全慶の要請を受けて文面の一部を書き直していたと推測できる。<sup>(39)</sup>

このほか翁同龢は、廷臣會議に参加して諮問に備えるよう命じられていた張之洞と會い、彼の意見を聞いている。その際に張之洞は、崇厚の結んだリヴァディア條約をそのまま批准したうえで、崇厚を斷罪すればよいと主張する。そして翁同龢は、張之洞の意見を「高論」と酷評する。

それでは、翁同龢がこのような評價をくだした理由は、どこにあったのだろうか。張之洞の主張が實現できたと假定すると、確かに調印した條約を批准するため、崇厚の斷罪は内政の範疇となり、外交上は問題がないように見える。しかし批准拒否は、兩皇太后および王公・官僚が、リヴァディア條約の内容が清側に著しく不利であったことに不満を持ったことに起因していた。また調停は、崇厚を死罪に處すことがロシアの體面を損ない開戦につながるのを防ぐためのものであり、それを無視しての斷罪は、提唱者であるイギリス・フランスの體面をも失わせ、兩國を敵に回しかねないという危険がある。つまり張之洞の意見は、現實味のないものだったのである。

廷臣會議が行われた翌十五日、翁同龢は内閣へ行き、上奏文に署名する（註<sup>(39)</sup>參照）。これは主稿、つまり翁同龢が會議後に再修正したものであったと考えられる。そして十六日に、廷臣會議の結果を受けた各種の上奏文が提出される。こ



れに對して兩皇太后は、同日中に懿旨を降していない。この日に召見を受けた王文韶は、自身の日記に「廷臣會議の上奏文が提出され、別奏および代奏が全部で十二件あった。受け取った諭旨は、まだ「それらを」見終わっていないので、しばらく留め置く「とあった」と記している。<sup>(40)</sup>そして、翌日以降も召見を受けた王文韶は、そこで上奏に對する懿旨が降されないことを氣にする記述を日記に残している。<sup>(41)</sup>これは廷臣會議を経てもなお、すぐには兩皇太后の意が決しなかったことを意味する。彼女らは、元來の意思である主戦と大多數の臣下が求める調停との間で、依然揺れていたのだろう。そして十九日になってようやく、召見にて崇厚の死罪を暫定的に免除することが傳えられる。<sup>(42)</sup>ここから總理衙門大臣が、自らの上奏と召見での説得だけだった時とは異なり、廷臣會議の結果を加えることで調停の受け入れという政策決定に導くことに成功していることが分かる。つまり廷臣會議が、兩皇太后の政策決定に影響を與えていたと考えられるのである。

## おわりに

本事案において總理衙門は、五月四日から五日午前の中に、崇厚の罪を減免しロシアと交渉するという政策に轉換した。これは先行研究が述べるごとく、李鴻章による再三の勧め、劉坤一との會談を経てのものである。ただし、イギリス駐清公使による調停の申し出を受けた李鴻章が、それに應じるよう最初に獻策してから轉換に至るまでに半月以上もかかったのは、單純に總理衙門が從來の考えを變えず、李鴻章の意見をなかなか採用しなかったからというわけではない。というのは、恭親王を除く總理衙門大臣は、醇親王と相談した四月十八日の段階ですでに、調停受け入れの可能性を視野におさめた行動を取りはじめているからである。しかし彼らは、主戦である兩皇太后への報告ができていなかった。また恭親王との話し合いもまだであった。そのため、恭親王と意思の疎通を圖るなど、兩皇太后の説得に向けた準備を行うのに時を要したのである。

政策轉換の後、總理衙門は上奏と召見の二つの方法で、兩皇太后から調停の認可を得ようと試みたと考えられる。まず

總理衙門名義の二種類の上奏文が、王文韶の手で作成され、五月八日に提出される。續いて十日に、召見を受けた王文韶が、これら上奏文に關する諮問に答える。そして總理衙門は、請願を裁可する懿旨がまだ降されていない同日午後、イギリス・フランス公使に調停を斡旋する。ここから、總理衙門の説得により、十日の召見の場で一旦は調停を進めることが、皇太后と總理衙門との間で既定路線になっていたと推測できる。しかし、それに反対する上奏文が寶廷らによって提出されたことで事態は急變する。元來、主戦の考えを持っていた皇太后が態度を硬化させ、崇厚の赦免と調停の受け入れについて廷臣會議を開いて話し合うよう命じたのである。<sup>(43)</sup>

そこで總理衙門は、主稿を任された内閣とともに、翁同龢の協力を得つつ自らの主張を軸にした内容を持つ原案を作成し、廷臣會議に臨むことになる。廷臣會議の構圖は、懿旨を見る限り、調停の受け入れを主張する總理衙門の意見と、彼らに反対する寶廷・黃體芳のそれであった。しかし實際には、總理衙門による事前の根回しもあって、調停に應じるといふ大枠のもと、崇厚の減免をどう扱うかが議論の焦點となる。一方の兩皇太后は、どちらかという調停を快く思っていなかったようである。しかし廷臣會議の結果は、強硬論を説く張之洞などによる一部を除き、ほとんどの参加者が調停の受け入れを請願するといふものであった。そのため最終的には、調停を望む各意見を折衷させた形で決定がなされる。このように兩皇太后は、廷臣會議を経たさらなる説得を受け、總理衙門の主張通り調停を認可するという政策決定に至ったのである。

以上のように、日記と公文書を組み合わせた考察を行うことで、總理衙門が政策轉換をした背景や、廷臣會議の原案作成など、政策決定の舞臺裏の動きが具體的に現れてきた。また廷臣會議が、兩皇太后を説得するのに有効な手段として機能していた様子も看取される。<sup>(44)</sup> 他方、本件事案では兩皇太后が、一旦は決めた調停を翻し廷臣會議の開催を命じていた。これは彼女らが、總理衙門の請願を却下する方向での意見調整を期待して、會議の開催を命じていた可能性を示唆している。今後は事例研究を進める中で、このような點もふまえて皇太后・臣下の雙方向から廷臣會議の持つ意義を検討し、垂

簾聽政期における政策決定過程のあり方を考えていくことにしたい。

## 註

- (1) 本稿における年月日は、基本的に舊暦を用い、必要に應じて新暦を( )で補う。
- (2) 坂野正高『政治外交史——清末の根本資料を中心として——』坂野正高(等編)『近代中國研究入門』東京大學出版會、一九七四年、二二〇～二二一頁参照。中央・地方間でやり取りされた「函」の例としては、李鴻章の文集である吳汝綸(編)『李文忠公全集』一九〇五年所收の「譯署函稿」(總理衙門との通信に使用。譯署は、總理衙門の別稱)が挙げられる。
- (3) 代表的なものとして、坂野正高『近代中國政治外交史』東京大學出版會、一九七三年がある。なお、坂野が利用してきた公文書は、主に『大清實錄』などの編纂史料に収録されたものである。
- (4) 拙稿A「清佛戰爭前夜における清朝中央の外交政策決定過程」『東洋學報』九〇・三、二〇〇八年、一～三〇頁／拙稿B「光緒帝の親政開始をめぐる清朝中央の政策決定過程」『歴史學研究』八五・三、二〇〇九年、一六～三二頁。
- (5) 拙稿B、二九頁。
- (6) イリ問題に關する研究の一環として、西田保『左宗棠と新疆問題』一九四二年、二三五～二五〇頁／坂野正高掲書『三二五～三三三頁／Hsu, I. C. *The Li Crisis: A Study of Sino-Russian Diplomacy 1871-1881*. London, Oxford University Press, 1965, pp.78-94／李恩涵『會紀澤的外交』中央研究院近代史研究所、一九六六年、六三～一一八頁／李滋男『中俄伊犁交涉之研究』嘉新水泥公司文化基金會、一九七六年、四八～五八頁／厲聲『中俄伊犁交涉』新疆人民出版社、一九九五年、七七～一〇八頁／程文華『中俄伊犁交涉』『國立政治大學學報』九、一九六四年、三八～一四四頁／趙春晨『伊犁交涉中清朝統治集團的内部鬭爭』『西北大學學報(哲學社會科學版)』一九八四・三、一九八四年、八八～九五頁などがある。また、當時の政局を漢人官僚の出身地による派閥から検討した、林文仁『南北之爭與晚清政局一八六一～一八八四』中國社會科學出版社、二〇〇五年、一一三～一二七頁もある。
- (7) 李鴻章の文集については、近年、顧廷龍・戴逸(主編)『李鴻章全集』全三十九卷、安徽教育出版社、二〇〇八年が出版された。これは、『李文忠公全集』に収録された史料に見られる省略部分も掲載し、同時に新たな史料も追加する一方で、横組み簡體字で編集し直されている。そこで本稿では、『李文忠公全集』を参考にしつつ、『李鴻章全集』を使用する。
- (8) 書簡は、『李鴻章全集』三二・一、信函四、「復總署 請寬減崇厚罪名以固邦交」光緒六年四月十一日、五四七頁／同「復總署 請總署奏減崇厚罪名」光緒六年四月十五日、五

四九一五五〇頁(①李書簡)に、それぞれ収録されている。

- (9) 本事業において、總理衙門と李鴻章との間でやりとりされた書簡は、実際の書簡に書かれた日附と、總理衙門の作成した公文書に引用される際に附されるそれとが、一日ずつれている。これは、各々が自らの發送・受け取りの日時を記録した結果と考えられる。

- (10) 書簡は、『李鴻章全集』三十二、信函四、「復總署 委婉代達總署回復威使函」光緒六年四月十九日、五五一頁(後出史料2・③李書簡)／同「復總署 述英法二使議論」光緒六年四月二十五日、五五一～五五二頁／同「致總署 英法似可合力助我」光緒六年五月初一日、五五四頁に、それぞれ収録されている。

- (11) 書簡は『李鴻章全集』三十二、信函四「致劉峴莊制軍」、五五四頁である。

- (12) 正奏は、『清季外交史料』卷二十一、二葉表「總署奏崇厚獲罪英法德等國使臣來函請加寬摺」、片奏は、同四葉表「總署奏變通廢約即不足抑俄實足結英法之好片」として収録されている。

- (13) 坂野前掲書、三三〇頁。

- (14) 坂野正高は、當時の政策決定過程に影響を与えるものとして、軍機處・總理衙門・李鴻章に加え、清議(都察院や翰林院の中堅官僚等)による、儒教の傳統觀念に基づく政治的議論の存在を指摘している[坂野前掲書、三三一～三二四頁]。清議については、Rankin, M. B. “Public Opinion” and Political Power: *Qingyi* in Late Nineteenth

Century China” *Journal of Asian Studies* 41-3, 1982, pp.453-484等を参照。

pp.453-484等を参照。

- (15) 黃體芳の上奏文は、『清季外交史料』卷二十一、五葉裏「少詹黃體芳奏不宜徇各國之請輕釋崇厚摺」として収録されている。寶廷のものは、管見の限り見当たらないが、廷臣會議後に禮親王を筆頭に出された上奏文(主稿)に「寶廷・黃體芳の摺内に稱するところの、崇厚の罪名は宜しく輕減すべからずとあるは、自是の正論なり」と書かれているから、崇厚の減刑に反對する内容であったことが分かる[『清季外交史料』卷二十一、十二葉裏]。

- (16) 名は奕譞。同治帝の叔父(恭親王の弟)で、彼と慈禧太后の妹との間に生まれたのが、光緒帝である。當時は光緒帝の即位に伴い、全ての官職から離れていた。そのためこの時期に、彼が政策決定過程において果たしていた役割については、今後事例研究を通じて検討する必要がある。

- (17) 『翁同龢日記』光緒六年庚辰五月十六日に、「この日王大臣等一摺を除くの外、尙ほ十二件あり(惇邸另摺、醇邸別奏、王仁堪・徐會澧の兩摺は翰林院代す)」とある。日記中の王大臣等一摺(主稿)は『清季外交史料』卷二十一、十一葉裏に「禮親王世鐸等奏邊議崇厚罪名應徇外使之請予以減免摺」として収録されている。また、醇親王・王仁堪等の上奏文も、同卷二十一、八葉表～十一葉裏に収録されている。惇親王と徐會澧による二本は、管見の限り不明であるが、他に、胡聘之・王先謙が連名で出した上奏文、ならびに鍾佩賢と張之洞が提出したものの計三本が、同卷二

十一、六葉裏―八葉表／十二葉裏―十五葉表に掲載されている。なお、本稿で引用する史料の原文・書き下し・和譯における（ ）は、史料の著者による小註であることを示す。

- (18) 主稿および王仁堪等による上奏文が提出されたのは五月十六日だが(註(17)参照)、それらを収録した『清季外交史料』では、日附が五月十九日となっている。これは、同書が軍機處に保管してあった公文書を元に編纂されていることから、軍機處で整理した際につけられたものと考えられる。なお、同じく五月十九日と附されている張之洞のものも同様であると思われるが、管見の史料からは、正確な上奏日時を確認することができなかった。

- (19) 決定内容を伝える諭旨は、『大清德宗景(光緒)皇帝實錄』卷百十三、十二葉裏に、曾紀澤への命令は『清季外交史料』卷二十一、十五葉表に「旨寄曾紀澤着將崇厚暫免斬罪知照俄國並應修條約妥慎辦理」として収録されている。

- (20) 趙前掲論文、九二頁。

- (21) 史料の和譯における（ ）は引用者による説明、「」は文意を明確にするための引用者による補足である。また固有名詞には、傍線を附してある。以下の史料もこれに倣う。

- (22) 皇太后へのご機嫌伺いをした後の醇親王を招いていることから、「直房」は宮中にあった建物もしくは部屋の一つと思われるが、具體的には不明である。

- (23) 『王文韶日記』光緒六年五月初十日(後掲史料5)によ

ると、慈禧太后は二月二日から五月九日まで、體調不良のため召見できない状態にあったという。

- (24) 恭親王が動けない中、寶鋆らが醇親王に相談を持ちかけていたことは、當時の政策決定過程における醇親王の役割を考えるうえで、興味深い事實である。

- (25) ③李書簡に「本日(四月十九日―筆者註)辰刻に接奉せる四月十八日の復函は、一是を謹聆す。併せて威使に復せし信一件は、當に即ちに專人もて送交す」とある。「前掲『李鴻章全集』「復總署 委婉代達總署回復威使函」。

- (26) 前出『清季外交史料』「總署奏崇厚獲罪英法德等國使臣來函請加寬免摺」に「初四日、劉坤一 李鴻章の復するところの密函を將つて臣等に封送し」とある。

- (27) 李鴻章の五月一日附書簡に「寶使は五月初一日に起程して京に進み、威使は初三日に京に進むを擬す」とある。「前掲『李鴻章全集』「復總署 英法似可全力助我」。また『王文韶日記』光緒六年五月初六日に「午後總署に到るに、威安瑪來たる」と見える。ここから五月の初旬に、ウエード・ブーレが、相次いで天津から北京に來ていたことが分かる。

- (28) 總理衙門大臣が、六部の尙書・侍郎等を兼任していた状況については、錢實甫(編)『清代職官年表』第四冊、中華書局、一九八〇年、三〇二―一頁を参照。

- (29) 軍機大臣の職掌については、『清國行政法』一卷上、二〇四―二〇九頁を参照。

- (30) 拙稿A、一六―一七頁参照。

- (31) 懿旨は、『大清德宗景（光緒）皇帝實錄』卷百十三、九葉裏、光緒六年五月十二日に掲載されている。また翌日に、御前大臣に廷臣會議への参加を命じたものと、翰林院侍讀の張之洞に、廷臣會議までに諮問に備えるよう命じた二種類の懿旨が出される。これらは、『大清德宗景（光緒）皇帝實錄』卷百十三、九葉裏十葉表、光緒六年五月十三日に収録されている。
- (32) 廷臣會議が内閣大堂で行われることは、陳湛綺（編）『清季（未刊）收發文本電文輯錄』第一冊、全國圖書館文獻縮微複製中心、二〇〇六年、二〇五頁に掲載された「光緒六年正月立來文簿」中に見える、光緒六年五月十三日の内閣による通知に、「本衙門本月十四日辰刻に、本閣大堂に在りて公同會議するを定む」とあることから分かる。また十六日に結果を上奏することについては、同書二〇五頁に収録された光緒六年五月十四日の内閣による通知に、「會議の覆奏の一摺は、本月十六日に具奏するを定む」とある。
- (33) 李慈銘『越縕堂日記』光緒六年五月二十二日（國家編纂委員會・文獻叢編、第十二冊、廣陵書社、八七一頁）に「是の日十四日の會議の後を聞くに、内閣の主稿にて、王大臣以下公疏は、皆樞府（軍機處）筆者註」及び總理衙門の議に同じなり」とあることから分かる。なお、内閣に主稿を作成するよう命じた懿旨は、管見の限り見当たらない。
- (34) 日記によると、王文韶は十三日に、戸部にも行っている。
- (35) 北京にいた残る二名は、前述した全慶と宗室の載齡である。この他の大學士は、地方官として赴任していた李鴻章と左宗棠である。
- (36) これは、李慈銘が主稿を、軍機處・總理衙門の議論と同じであると評價している点からも傍證される（註(33)參照）。
- (37) 禮親王を筆頭として實際に提出された上奏文（註(17)參照）に、「監禁」の語は見えない。
- (38) 翁同龢が、原案の作成から會議中の修正に至るまで、主稿の文案作りに参加していた理由は、管見の史料からは不明である。これについては、事例研究を重ねる中で検討していく必要がある。
- (39) 『翁同龢日記』光緒六年庚辰五月十五日に「〔内〕閣に到りて奏稿に補畫す」とあることから、署名は少なくとも十五日までは行われていたことが分かる。この点も、主稿に可能な限り多くの署名を得るために、文面の修正を行っていたことの傍證となろう。
- (40) 原文は、「會議摺上、另摺及代奏者共十二件、奉諭以尙未看完、暫留未發」である『王文韶日記』光緒六年五月十六日。

(41) 『王文韶日記』 光緒六年五月十七日に、「入對して將に刻に及ばんとするも、會議の摺は仍ほ未發なり。大局は攸系にして、殊に懸懸なり」、同五月十八日に、「入對刻許なるも、會議の摺は仍ほ消息なく、殊に測るべからずして、已初散直す」とある。

(42) 『王文韶日記』 光緒六年五月十九日に「西聖（慈禧太后——筆者註） 出見するに、氣體は將次復原なりて、欣慰するに勝えず。定むるに暫らく崇罪を免ずるの議あり」とある。

(43) 本案では、清議の主張する調停の受け入れ反對は、兩皇太后による政策決定の内容に取り入れられていない。したがって清議の影響は、總理衙門の主張に反對することで廷臣會議が開催され、また翁同龢に主稿の再修正をさせたという形で現れたと言えよう。

(44) 光緒帝の親政開始をめぐる事案では、廷臣會議そのものは開かれなかったが、臣下がその開催に言及しつつ、皇太后を説得する様子が確認される『拙稿B、二八～二九頁』。

〔附記〕 本稿は、平成二十一年度科学研究費補助金（奨励研究）課題番號21904015による研究成果の一部である。

profound impact of the Tang-Song revolution extended to the law.

**POLITICAL DECISION-MAKING PROCESS AT THE HEART  
OF THE QING DYNASTY AND THE ZONGLI YAMEN  
AS SEEN IN THE ILI PROBLEM**

ŌTSUBO Yoshiyuki

This study is a reconstruction and analysis of the political decision-making process at the heart of the Qing dynasty, including the behind-the-scene movements, which cannot be seen in official documents, as one part of a consideration of political decision making in the “rule from behind the curtains” 垂簾聽政 by powerful women of the imperial family. It should be pointed out that on the basis of my previous studies, there existed three chief means of coordinating the views of the Empress Dowagers and their subjects in the process of political decision making, i.e., audiences 召見, memorials 上奏, and court conferences 廷臣會議. Then, keeping these methods in mind, I focus on and analyze the activities of the *Zongli Yamen Dacheng* 總理衙門大臣. As a specific object of examination, I take up the process of arriving at the decision to prepare for the reopening of negotiations with Russia in 1880 in an attempt to resolve the problem of Ili and the pardon of *Chong Hou* 崇厚, who had been sentenced to death as a result of his role in the Treaty of Livadia.

In this regard, the discussions between the *Zongli Yamen Dacheng* without Prince *Gong* 恭親王 and Prince *Chun* 醇親王 were behind the political shift on negotiations with Russia and the pardon of *Chong Hou*. Thereafter, it can be surmised that the *Zongli Yamen*, which had issued an opinion in favor of negotiations with the participation of Prince *Gong*, employed memorials and audiences in an attempt to persuade the Empress Dowagers *Cian* 慈安 and *Cixi* 慈禧 to have the opening of negotiations approved. Two memorials were then issued in the name of the *Zongli Yamen*, and due to the persuasion employed in the audiences, and it can be inferred that proceeding with the negotiations for a time was a strategy that had been predetermined between the Dowagers and the *Zongli Yamen*. However, with the issuance of an opposing memorial, the situation changed abruptly. The views of the Empress Dowagers, which had theretofore been hawk-



ish, were altered, and they ordered a court conference to discuss a pardon for *Chong Hou* and the re-opening negotiations with the Russians.

At that point in preparation for the court conference the *Zongli Yamen* together with the grand secretary of the cabinet who had been charged with drafting a proposal gained the cooperation of *Weng Tonghe* 翁同龢, and composed a proposal whose content was based on the position it had originally advocated. The majority of the participants in the conference then requested the acceptance of negotiations. The Empress Dowagers who had appeared not to favor negotiations, on the other hand accepted this result, agreeing to permit the negotiations that they had kept on reserve when the persuasion of the *Zongli Yamen* alone had been involved. From this it can be understood that the result of the court conferences influenced the political decision making of the two Empress Dowagers.

**ON THE NEGOTIATIONS FOR THE PEACE AGREEMENT  
OF 1734-40 BETWEEN THE QING AND ZUNGHAR:  
INTERNATIONAL RELATIONS IN CENTRAL EURASIA  
AFTER THE CONCLUSION OF THE TREATY  
OF KYAKHTA**

SHIBUYA Kōichi

The peace agreement between Qing and Zunghar of 1740 was a historical turning point in which the two parties established for the first time peaceful and amicable relations, but the understanding of the circumstances and contents of the agreement has been insufficient. This study of the process of the negotiations for a peace agreement and the content of the peace agreement through a detailed examination of newly discovered Manchu language sources addresses the peace agreement from the viewpoint of international relations in central Eurasia and focuses in particular on the influence of the conclusion of the Treaty of Kyakhta of 1728.

From the opening of negotiations both sides were strongly conscious of their relations with Russia. From the start the Yongzheng emperor attempted to determine the national boundary in manner of the Treaty of Kyakhta in which the de-